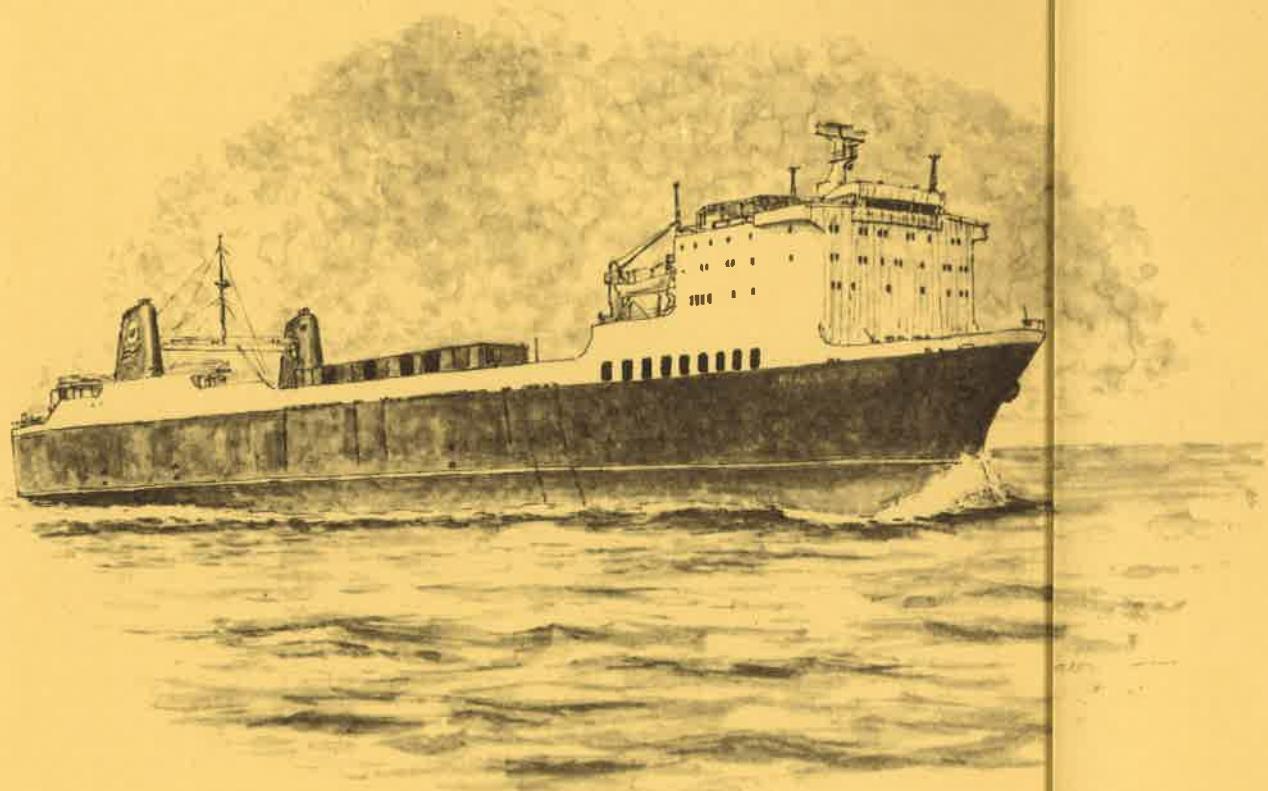


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第12号

海文堂書店 1983・1 [12]

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電) 078-331-6501

目

次

私の好きな川柳	時 実 新 子	2
神戸市立博物館へのいざない	三 好 唯 義	5
不思議な小説「風の歌を聴け」	植 村 達 男	10
武庫川のほとり	野 田 豊 子	13
むかし画廊と豚まん	林 喜 芳	18
ぶっく・えんど		21
郷土誌の窓		23
海文堂案内板		27

私の好きな川柳

に、いいとしをしたおじさまが懸命にマイクを握って恍惚と歌つていらっしゃる図がある。いいな、と思う。

「社長、もう一曲！」なんておだてられて又調子づばずれな挑戦である。私たちから上の世代はカラオケブームなど知らない青春だったのだもの。

好きな句というのはふとしたはずみに思い出したりつぶやいたりするものであろう。

くちずさんで「今のわが身」に当てはめてみて苦笑するたぐいである。したがって、かなならずしも名句でなくともよいし、漢字仮名の使いわけもさだかでないのが本当であろうと思う。

耳で聞く川柳と活字で見る川柳の「好き」にも微妙な差がある。そして究極は舌頭千転のリズムをもち内容も平明なものが記憶されるようだ。常日ごろはクラシックだジャズだと気負っている若者が、夕ぐれの流れ歌にふつと涙ぐむのに似ている。

おだてにも乗ろういのちに限りある

葉

ほんのたまさかスナックなどへなだれ込んで見る光景

わかれゆくこの期におよび針と糸

葉

けれどやっぱりこの句の作者も私も古い女なのだからと共鳴する。年下の恋びとが去っていく。「じゃあな」と、彼の心はもう新しいピチピチとした女のほうへとんでいる。ふと見るとスースの鉤が取れかかっている。古い女は針と糸を出して鉤をつけてやる。まさに「この期におよび」の女ごころがかなしく迫る。

きらわれた二十五歳のひがんばな

夢草

この句は年齢だけが漢字であつたと覚えている。花に

としを設定したのも心憎いし、わざとかな文字を使って

のやしさも憎いなと思う。ひがんばなを女に置きかえて鑑賞するのはたやすいが、この句の場合、花そのものに焦点を合わせたほうがより面白うてかなしいと私は思う。人間にも二十五歳は自我が固まって初々しさも消えなんとする曲がり角である。男を相手にへらず口も叩くし、かと思えばカマトトぶつたりもして「嫌われ」やすい年ごろである。

彼岸花、まんじゅしやげ、あれほど美しい花を人はなげ「しひと花」「てくされ」などと呼ぶのかしら。ましてや盛りを少し過ぎた二十五歳の花がいじらしい。

かくれんほかえってこないかも知れぬ

夢草

「いってらっしゃい」と送り出す朝々に妻たる人はみじんの疑いも持たぬのが普通であろう。若い恋ひとたちのバイバイも永遠の明日を信じているかに見える。しかし、そんなときこの川柳を思い出すとおそろしい。

くちづけのさんねんさきをみているか

和尾

この句を何度くちずさんだことだろうか。恋はかならず終わる。終わらないまでも初会のみずみずしさは短命である。ニヒルで鋭いこの一句に思い知らされる人は多いと思う。それでも男と女は出会い、こりてもこりずにおなじ道をたどるのである。私はそこに美しさを見る。わかりきっているからといって避けて通る人よりも、どうしようもなく人を愛する弱い人間が私は好きである。

鳩時計眠くなつたら寝ることだ

和尾

疲れたときに思い出す句。さびしいときにも思い出す句である。ボッボ、ボッボと扉を開けて時を告げる鳩時計、お前さんも律気に仕事をこなしている。

「眠くなつたら寝ることだ」それがすべてを忘れさせてくれる唯一の方法なのだと自分に言いきかせてもらそうはいかない身のつらさ。ここにもニヒルな苦笑があつてそれが私を誘い込む。誰もみな……ボッボ、ボッボと生

きている。

飯食らうただただ強い蟻である 俊生

自己批判と自己肯定がせめぎあつていて妙に忘れかねる句である。蟻はもちろん作者自身。そしてあなたであり私である。これでいいのであろうかという自問の中で無味乾燥な日日が過ぎていく。その果てにふしぎな力がみなぎってくる。「飯食らう」健康な蟻、ただただ強い忍耐力しか持たぬ蟻の生涯にも、それなりの幸福があることに気付いたせいであろう。蝶には蝶のキリギリスにはキリギリスの生き方がある。肯定が次第に心を占めてくるとき、この句は一種の自信を私に与えてくれるのである。

発覚や天にうそぶく梨の花 タカコ

梨の花はどちらかといえば地味でおとなしいイメージの花である。それが、悪事露見におよぶや一齊に天にうそぶいた、というのだからこれは正に「女」の正体をつかんで余すところがない。そのプロセスにおいて女は泣

神戸市立博物館への いざない

(学芸員) 三好唯義

一 博物館開館

神戸市立博物館は人文系の総合博物館として、昭和五十七年十一月三日に開館し、一般に公開された。館の所在地は神戸市中央区京町、三宮の駅から南へ徒歩で十分

あまりという近さである。また館の周辺は、明治時代には外国人居留地であったところであり、神戸開港以後の

外国貿易の中心地であった。もちろん現在でも神戸の中 心的なビジネス地区である。交通の便という点からも、また神戸の歴史という点からみても、博物館としてはまさに的をえた立地場所といえるであろう。

博物館の基本テーマは「国際文化交流—東西文化の接觸と変容」を掲げ、原始から近・現代にいたるまでの神 戸を中心とした“文化交流”というものを展示・解説し

いたりうなれたりのしさを見せるが、いったん心を決めると実にみごとな開き直りを見せるものだ。私も女であるゆえに好む。

Ⅰ 東アジアとの交流

Ⅱ 地方文化の発展

III 江戸時代の兵庫津

IV 鎮国下の日本と外国

V 開港をめぐって

VI 文明開化と近代化

各パートにおいて外国との交流というものに力点がおかれており、とりわけ「海」というものを重視していることは、神戸の博物館としての特色であろうか。また、時代的にみるとIとIIで古代から中世までを扱い、IIIからVで近世から現代までを扱っている。このように江戸時代以降の展示に多くのパート、展示面積をあてていることは、江戸時代の兵庫津を基礎として、明治時代から今まで発展してきた神戸の歴史性に由来するものであり、他館ではみられない特色であろう。

更に市立南蛮美術館の収蔵品は、新博物館の一室（南蛮美術館）で従来どおりテーマを定め、恒常的に展示が行なわれる。つまり南蛮美術館は、新しい博物館の中で、従来よりも更に広い展示場をもつて南蛮紅毛美術の普及に努めることとなつた。これも神戸市立博物館の大きな特色の一つである。

余年にわたつて集めつけた古地図コレクションは質量ともに日本一であり、欧米諸国にくらべて遅れている日本の古地図研究に寄与すること大である。また博物館で展示されることにより、一般の人々への古地図が普及することの意識も大きい。今回の特展では四千点すべてを展示することは無理なので、見て楽しく、わかりやすいものをという点から「日本図」、「道中図」、「世界図」の三つのテーマを定め百十一点を選んで展示した。

日本図 行基図と呼ばれる古い日本図から、伊能忠敬の実測による正確な日本図までのあゆみをたどる。

道中図 江戸時代には庶民の間でさかんに旅が行われた。その旅の友となつた地図類を展示了。

世界図 江戸時代の人々が作った世界図を展示了。特に

蘭学者の作った正確な世界図や、庶民の親しんでいたおもしろい世界図がみられる。

日本では十六世紀半ばにヨーロッパ人と出会つてから急速に地図が発達し、江戸時代には手書きの地図をはじめ、木版で印刷された地図が大量に作成された。今回の

また新しい博物館らしく、学習室のビデオ、図書室等の諸施設もととのつて。多くの人々の興味に応じることができるものと思われる。

三 特別展示について

特別展示、いわゆる特展はその名のとおり特別にテーマを設定し、他館とも協力しあいながら大規模に行なわれるものである。周知のように神戸市立博物館は開館特別展として「海のシルク・ロード」をオランダや日本各地の博物館等の協力をえて開催した。十五世紀以降のヨーロッパとアジア・日本との交流を海上交通路というものを基礎に展示・解説したものであった。期間中の入館者数は七万五千人にのぼり、成功裡に終えることができた。

昭和五十八年には四回の特展が計画されているが、一月十五日からは「南波松太郎氏収集 古地図の世界」展が行なわれている。これは昨年十二月に南波松太郎氏より神戸市立博物館に寄贈された約四千点の古地図のお披露目として開催したものである。南波松太郎氏が六十有

展示ではこのような日本における地図のあゆみも系統立ててたどれるよう工夫されている。このような展示を一博物館だけでできるのは神戸市立博物館以外に日本では他はない。この特展以後も館内に古地図の部屋を設け、年に数回展示される予定である。

また今春の四月と五月には神戸市内の仏教美術を中心とした「神戸の文化財」展が開催される予定であり、現在準備中である。

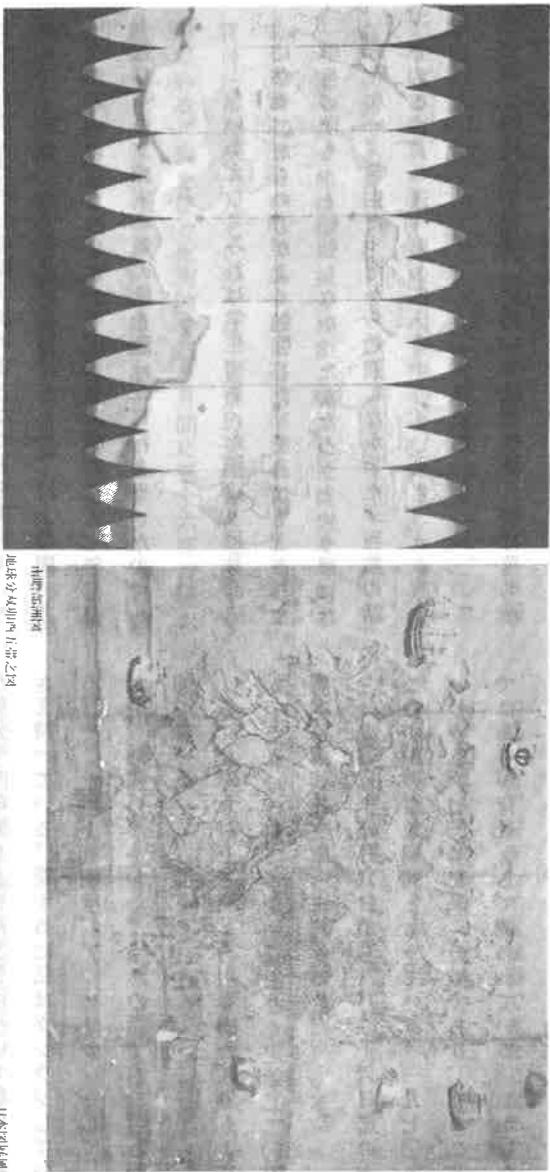
四 さいごに

神戸市立博物館の紹介、また館へのいざないを意向して書きはじめたものの、あまりにも雑文にすぎたようである。ただ館蔵資料の豊富さが理解していただけたら幸いである。

最後に私個人の自己流の博物館見学法を述べて終えることにする。私は展示品を一点一点熱心に見ないことにしている。博物館に勤める者が不謹慎なことをいうようであるが、正直そののである。しかし、たとえば神戸市立博物館を例にとっても、常に数百点の資料が展示さ

れている。これを一点一点熱心に見ていたら、おそらく半分もみないうちに疲れきってしまうであろう。私自身はどの博物館に入っても、一応全体を一通りさっと見ることにしている。そしてその中で興味のひかれたもののは前でやや熱心に立ちどまることにしている。博物館は勉強するところであるのだが、「知的な遊び場」くらいの気持ちをもって自己の興味のないものまで無理して見る必要はさらさないのである。一つでも一つでも興味のひかれるものを見つけたら、博物館見学は成功であったと私は考える。

多くの方々に、何度も何度も神戸市立博物館を訪ねて来てもらい、自分でけの興味ある、おもしろい資料を一つ一つ増やしていくいただきたいと願うものである。



古地図の世界

不思議な小説 「風の歌を聴け」

植村達男

村上春樹の「風の歌を聴け」という小説を読んだ。

昭和五十七年四月八日付朝日新聞夕刊の「日記から」というコラムに村上春樹が次のようにことを書いていた。そして、それにひどく共感を持ったので、村上春樹（という作家）の本を搜しまわり、新刊（昭和五十七年七月十五日）の文庫本「風の歌を聴け」に行き当つたのである。

— 思いかえしてみれば学生であった頃よりは社会人になつてからの方がよく勉強した。それでもどうして学生の頃もっと勉強しなかつたんだろうという風には考えない。学生だったから勉強しなかつた。当然の話である。

「学生時代の不勉強」については、私は人後に落ちない物語である。

「僕」は、前は海、後ろは山、隣りには巨大な港町がある人口七万余の町で生まれ、高校卒業まで、この町で育つた。今（一九七〇年）は、東京の大学で生物学を学んでいる。猫を使つた実験で二ヶ月間に三十六匹の猫を殺したというから、この「僕」はデモやストライキにばかり明け暮れしていたわけではない。この物語は丁度「僕」が大学が夏休みで帰省中のできごとを記したものである。

「僕」の友達鼠は、「僕」と同じく人口七万余りの町に住んでいる。鼠の父は金持ちである。自宅は三階建て、斜面をくりぬいたガレージには父親のベンツと鼠のトライアンフTRIが並んでいる。鼠は最近大学を止め、小説を書き始めた。「僕」と鼠は度々会って色々なことについて言葉をかわす。次は鼠と「僕」が旧華族の別邸を改築したホテルの庭のブールで交した対話である。

い。その点では私は村上春樹と同じである。しかし、大学卒業後二十年近くを得た私は、今でも学生時代に勉強しなかつたことについて若干のうしろめたさと後悔の念をもち続けている。私は大学では本来勉強するべき経済学にはあまり関心を持たなかつた。その一方ではフランス語と卒業論文のオーストラリア植民史にはや力をつけた。そして、学校の成績などというものから全く自由な気分で四年間を過したことについて私は一種の誇り（？）さえ持つてゐる。要するに私はウジウジしているのである。そこを村上春樹は、アッケラカンとして「学生だから勉強しなかつた。当然の話である。」と簡単に言い切つてゐる。

失礼ながら村上春樹と角川春樹の区別もよく分からなかつた私は、何の予備知識もなく定価二二〇円の薄い文庫本（講談社文庫）を読み始めた。

一九七〇年八月八日から八月二十六日迄の十八日間がこの小説の対象期間となつてゐる。一九七〇年といえば、いわゆる「七〇年安保」の年であり、そのこともわずかではあるが背景として使われてゐる。しかしながら、こ

「時々ね、どうしても我慢できなくなることがあるんだ。自分が金持ちだつてことにな。逃げだしたくなるんだよ。わかるかい？」

「わかるわけないさ。」僕はあきれで言つた。

レコード店の店員の娘はまだ二十歳に達していない。「僕」と彼女が出会つたのは「ジェイズ・バー」の洗面所である。彼女は八歳のとき電気掃除機のモーターに手の小指をはさんで切断した。このため彼女の手の指は九本しかない。

「帰ったわ」と彼女が言った。

「会いたいな。」

「今出られる？」

「もちろん。」

「五時にYWCAの門の前で。」

「YWCAで何してる？」

「フランス語会話。」……

そして、「僕」は彼女をむかえるためにYWCAの前に車をつける。YWCAの建物は薄汚れて陰気であり、その隣りには新しいが安手の貸ビルが建っている。

「ジェイズ・バー」のバーでは港の近くにあり、制服を着たフランス水兵が遊びにきたりする。白いベレー帽に赤いポンポンのついた兵士らしかぬ格好はいかにも芸術の国フランスらしく、またこの物語にも似つかわしい。

「風の歌を聴け」は約百五十ページの薄い文庫本であるが、ところどころにエンパイアステートビル屋上から飛び降りて死んだ米国の作家デレク・ハートフィールド（一九〇九年—一九三八年）のことが言及される。村上春樹はこの作家から多大の影響を受けているようである。この小説の最後の部分（あとがきにかえて）で村上春樹は高校生の頃、神戸の古本屋で外国船員の置いていたらしいハートフィールドのベーパーバックスをまとめて買った経験を語っている。この本には「神戸」という語がたった一カ所この部分にててくる。「ブルーアンカー」

「風の歌を聴け」の舞台となつた港町は芦屋であることが推測できる。

この小説を読み終つて暫くしてから、私は村上春樹が育つた人口七万人余の町は芦屋であることを確認した。この小説を読み終つて暫くしてから、私は村上春樹が昭和二十四年生まれであること。芦屋に住んでいたことがあること、神戸市内の県立高校に通つていたことを確認した。

この小説を読み終つて暫くしてから、私は村上春樹がや乾いた文体までもが神戸（阪神間）の雰囲気を十分に伝える不思議な魅力をもつ小説である。

この小説を読み終つて暫くしてから、私は村上春樹が昭和二十四年生まれであること。芦屋に住んでいたことを確認した。

武庫川のほとり

文学Uの会会員 野田豊子

1

少女は古い編上げの靴を穿いていた。

堤防にはところどころ水溜りがあつて、乾いた土を選びながら歩いている少女の後ろ姿は、剽軽にスキップしているようだった。

土手下の河川敷には、幾抱えもある楠の大樹が数本、地上にまで太い根を脈立たせ、大空に向かって葉を繁らせていた。反対側の民家の方へ下りる坂道にも、常に緑をたたえた楠の木があり、そこには狭いながら御手洗のついた神社が祀られ、楠の木はこの一帯を護るご神木になっていた。

民家へさがる道と、河原へおりる道とが両手のように岐れる地点の川寄りに、いつも一人の靴屋が店をひろげていた。店をひろげるといつても、たかだか古靴を並べ、修理道具を詰めた木箱に靴台、お客さん用の丸椅子を前

に置いているだけにすぎなかつたが。

少女が小躍りするようにそこを通り過ぎようとした時、そのおじさんと目が合つた。

「あ、その靴を見てあげよう。今、手が空いているから、ここへ掛けて……」

少女は、ふいに声をかけられたことと、いかに商売柄といえ、馴れ馴れしく穿いているものを見られたことにどきっとし、一瞬むっとした。けれどそのまま立ち去る勇気がなく立ちどまってしまった。

「もう少し、早目に半革打つとくほうが……靴が可哀そうだから……」

少女は、そう言われると顔から火が出る思いがした。

靴底が破れ、水が沁みるようになつていていたのだ。

片足ずつ脱いで待つてゐる時間が長かった。おじさんは器用な手付きで、細かな釘を二、三本口に咥えると、順番に抜き取り、等間隔に釘を当てて手際よく打つていった。外形にそつてへりをきれいに削ぎ落とす。あと丁寧にペーパーをかけ、さいごに靴墨をぬり、ピカピカに仕上げて靴を穿かせてくれたのだった。

少女はその後靴修理のその店をいつも意識した。靴を気持ちよく穿く時は背すじが伸びた。汚れたままでいる時は小さくなつて通っていた。かかとが減つてくると気が気でなかつた。けれどその後、向こうから声を掛けることは全くなつた。殆んど客すら見ることなく、いつも黙々と俯向いて手を動かしていた。彼は誠実で丁寧で、きっと評判も徐々にのぼつたのだろう。

その堤防を少し降りたところから、尼崎東部、南部の工場地帯へ向かう通勤客のバスの発着所があり、朝に夕かなりの足が往来した。出勤途上いたんだ靴を預けていく。帰りに修繕できた靴を穿き、ついでに穿いていたのを置いて帰る。舗装路のなかた當時、靴の磨滅は激しかつた。それに靴は、滅多に買えない高価な必需品だった。

修理前の汚れて積まれたハイヒールは、何だか見るのが恥しかつた。しかしきれいに磨かれて黒光りしている男物など威儀があつて誇らしげにさえ見えていた。そんなふうで、靴屋の店先の周囲はいつも忙しげで繁昌して、

少女は今日くらい半革を打ちたいと思つていても、容易に頼めないまま、擦り減つてゆく靴が気になつた。一足きりしかないその靴が、とうとう寿命がきてしまつた時は小さくなつて通つていた。かかとが減つてくると気が気でなかつた。けれどその後、向こうから声を掛けることは全くなつた。殆んど客すら見ることなく、いつも黙々と俯向いて手を動かしていた。彼は誠実で丁寧で、きっと評判も徐々にのぼつたのだろう。

阪神電車の小さな駅、武庫川駅、昔お花見の桜もあつたといわれる。水面に映る架橋を電車はさまざまな人を乗せ、轟音を響かせて往々來した。

3

常緑樹の楠の木が、一齊に若い芽を吹きだす五月、古い葉は風にあおられ樹々の梢を離れてゆき、落ち葉は堤防の上から河川敷一帯を埋めつくし、道の窪みに吹き溜つてゆく。

靴職人のおじさんは頭にも枯れ葉が止まり、けれどおじさんは一向気にかけない。彼は夕方遅く、帰る間際に、すりちびた箒でもつてその辺を掃除してゆく。掃く分量が多くなつたとき、季節は衣更えを終え、おじさんの顔もだんだん陽灼けしていった。

暑い日には楠がほどよい川べりの緑陰になつた。ささやかな靴屋の周りには、暇のあるお年寄りや、虫籠をさ

げた子供たちが集まつた。

少女の靴は日一日と穴があき、もう修理屋の前には出されなくなり、ついに家の下駄箱にしまつてしまつた。

少女はその頃、勤めの傍ら尼崎城内にできた夜間の併設中学に通うようになつてゐた。終戦のどさくさに彼女は学業を中断させていた。旧制の中等学校が新制高校に変わつた過渡期であつた。

遅く学校を終えて帰る頃、もうそこはきれいに片づけられて何もなかつた。しかし昼間人の坐つていた気配は確かにあり、温かさが残つてゐた。たまに早く帰る日、靴屋は変わらずその場所で店を出し、いつも同じようにごちゃごちゃ並べたまま仕事に精を出して、少女と顔を合わせることはなかつた。

秋たつ日、少女の上に、思いがけなく悲しい夢であつてほしい現実が訪れた。かけがいのない兄、彼女にとつて常に希望の星であったたつた一人の兄が他界した。

終戦後、兵役にあつた兄は、原爆三日目に母港の宇品へ着き焼死者や瓦礫のあと片づけを続けたといふ。疎開先へひょっこり復員してきた兄を迎えた日の喜び、母た

少女はだんだんおとなになつた。靴の流行もめまぐるしく、女性のハイヒールは細く危げなかかとになつたり、四角になつたり、先が尖つたり、履き潰さない以前に履けなくなつた。家の靴入れに数が増える頃、もう編み上げの靴は見当らなかつた。

靴修理の店先も、目に見えてさびれてゆくようだつた。雨の日が続くと店はでない。昔からお天氣あつての商売に変りなかつたが、雨の雪がおじさんの生活を追いつめてゆく思いがした。他に転職すればいいのに……、かつて少女であつた私は時折じれつたくそつ思つた。

やがて結婚し、主婦になり、母親にもなつた私は、あの靴屋さんに奥さんはいたのだろうか。そして子供や身寄りはと思うこともしばしばにしてあつた。

武庫川に冬の寒さが訪れていた。早い日暮れに対岸の

松林が茜に染まり、ものみな赫い。寒さをよける板廻いの中に、片付けはじめた靴屋さんの顔がふっとこちらを向いた途端、私は息をのみ亞然とした。あのおじさんの顔はなんと道化師のように塗りたくられ、頬は丸く真赤に描かれていた。あの靴屋が気が触れた。私は通りすぎても彼の顔がまとわりついた。

そののちもそこを通るたび、その顔は道化師のまま仕事をしていた。昔日の賑わいぶりはもはや面影にとどめなかつたが、彼は、やはり変らず深く俯向いて何かしてゐた。今さら話しかけることに気憚れする私は、ただ遠く眺めるだけだった。そして彼の仕事はますます淋しくなつてゆくようだった。

最後に見た彼は、何もしていなかつた。もうどのくらい仕事を待つ日が続いているのか、以前なら靴を手がけなくとも箱や備品の整理をしていて。それが何もしていなかつた。汚れた服、少なくなつた道具を前に、ただうなだれていた。おこもさん……私はそういう言葉を打ち消し踏み散らした。

雨上がりの日、私に声をかけた彼は、こざっぱりと感一瞬トップモーションで停まるかに思われた。

川原を駆ける子供たちが、釣り糸を垂らす釣り人が、

警察から不法占拠や、いわれてたいうことやし、けど、

どこが悪かったか、もう亡くなつて、だいぶになるやろ」

青雲の志を氣恥かしくも月に祈つた私がそこにいた。武庫川のたそがれにギターを抱えた兄が笑つていた。すべて夢のようになつてしまつていて。ただ太い大きな楠の木だけは、まだしっかりとそこに立つて、過ぎゆく人の思いの端をじつと感じとつているかと思えてならない。

今、阪神電鉄武庫川駅の金網の柵に立つと、四十二号線と阪神高速の巨大な道路がたちはだかり、昔の余情は見あたらない。あの水溜りの堤防も舗装され、自転車置場がすらりとできてしまつていて。ただ太い大きな楠の木だけは、まだしっかりとそこに立つて、過ぎゆく人の思いの端をじつと感じとつているかと思えてならない。

工都尼崎の空はいつも煤塵で汚れ、排気ガスで汚染される夜が明けた。唯一澄んだ空気のありかといえば武庫川、自然の移りかわりは新しい季節を告げていた。

新緑はみずみずしく、楠の木には小雀たちが群がつていた。その日、くまなく晴れ上がつた日であつたのに靴屋の店はでていなかつた。いつもの彼の場所に空から舞つてくる落ち葉が溜つた。

辺りに寄つてゐる老人に私は近づいて尋ねてみた。

「ここに靴屋さんがあつたのだけれど」

老人は川へ向けた視線のまま答えた。

「ああ、あのおっちゃん。嫁さん亡くしたあとピエロになつてしまつたということや。それに仕事もあらへんし、

5

むかし 画廊と豚まん

林 喜芳

先号に大塚銀次郎さんの聞き書きをすこし書いたが、そのつづきが日本での画廊発祥の萬矢（こうし）となる。川島理一郎画伯を三宮駅（いまの元町駅）に見送った大塚さんら新進画家たちの一一行は駅前から鯉川筋をさがり、西村のパン屋でお茶を飲んだ。雑談のなかばに気付いたのが直ぐ目の前、筋向いの赤レンガ造り三階建の倉庫であり、そこには「かしや」札がブラさがっている。若い画家たちの目には異様に新鮮にその倉庫は映った。シャレた建物ではないか。そこで話は飛躍した。その建物を借りて作品陳列の場所にしたい、と……。欲望はふくらむ。一日酔いの頭で執拗に思案を積み重ねた。結局、画家たちで会費を出し合い、家賃と電気代を支払えば実現可能ではないかとの夢のような結論を得た。その頃の帰朝画家の話によればパリなどではギャラリーがあつて

画家や美術愛好家などは至極調法しているらしい。是非日本にもそれが必要である。いま神戸で作品展をひらくには商業会議所か神港俱楽部を借りねばならず、それは作品展示の枠組みを大工にたのみ、壁には幔幕を張りめぐらし、会が終れば元の姿に戻して返さねばならぬ。それこそタイヘンな作業であった。簡単に誰でもが使用できる場所をとの希求は画家たち全体の願いであった。大塚さんはもちろん卒先して協力し、総力を結集した。亀高文子さんがその倉庫の持ち主と知り合いであり、偶然か、その倉庫が輸出額縁の置き場に使用されていたとか不思議なかわりが糸をからませ、家主の好意は家賃百五十円を百円に便宜してくれた。その頃は凡てが鷹揚（おうよう）で都合よく運んだ。そうなると若い画家たち、早速スクリーンにドンゴロス（粗糾麻糸の布、輸出入の穀物の袋に使用された）を張り、ベンキはお手のもの、斯くして形だけは出来あがつた。まだ年少の私は友人とたまたまそこを覗いたことがあるが、そのドンゴロスに囲まれた（床にも）粗野な感じに、まだ見ぬ南方の風物

を想像した。

その後も協力者が現われて、一隅にバーをつくり、コヒー・酒なども飲めるようになり、ギャラリー兼画家たちの寄り集まるクラブ様（よう）のものができあがつた。そこで当時、朝日新聞神戸支局長だった朝倉斯道（まだ芥郎と言っていた）さんがギャラリーをはじつて「画廊」と命名したと伝えられる。いまは画廊といえば単なる名詞と思われているが、これは純然たる朝倉さんの新造語で、そののち、それを真似て「〇〇画廊」「×画廊」と氾濫したが、昭和五年では日本唯一の画廊であり、ここだけの名詞であった。のちにここが「神戸画廊」とか「鯉川画廊」と呼ばれるようになったのは「画廊」簇生の故である。現在で言えば佐藤廉さんの「元町画廊」の位置にある。

大塚さんはものも序（ついで）と画廊管理一本にまとをしほられ、「神戸新聞通信」を本郷直彦さんに後継を委ねられた。「画廊」は昭和十八年頃までつづいたと言われるが、その原因が「戦争」であったか、どうかは私は知らない。個人としてはそれより早く企業整備令に

蹴飛ばされて喰うや喰わずの状態に陥り、文学にも美術にもお目にかかれぬ有様であった。

いま述べた「画廊」の開設が昭和五年、その頃になると活版屋の小僧の私も母に飯代（はんだい）を渡して多少の小遣錢を手にするようになつていた。人間は正直なもので、これまで済川新聞地で五銭のコーヒーを飲んでいたものが元町通りにて十五銭のコーヒーを飲むようになる。そこで通いはじめたのが三丁目の「エスペロ」である。入口に "English Spoken" と札がさがっているのがユニークでそれに魅かれた。事実、外人（多分船員だろうが）の客がよく出入りして、恰幅（かつぶく）のよいマスターと話していた。この主人も元は外国航路の船員だと言う。ほかに女給仕人が一人いて、その人が凄く美人であり、私と友人は蔭で彼女のことを「深夜の太陽」と愛称していた。彼女にか、イングリッシュにか、そのどちらにも魅かれたのである。私は夜間の実習学校で英語をすこし習つただけだが、そのまま忘却の渦に沈めるのは惜しいと思い、友人も私と同じ高小卒ながら何處で習つたのか、会話のすこしはこなせるので、彼は

熱心にマスターと客の対話ぶりに見とれ、聞き入り、同行の私の存在をすら忘れるほどだった。それが役に立ったものか、どうか？彼はその後、美亞蘭社英学塾の助手を勤めた。私はへどつちもつかず／＼お小遣いのせいが、お酒に走るようになつた。

そこで思いだしたのが喰い氣一方の頃のはなし。やはり昭和はじめ、南京町の豚饅頭ナニキンマツに魅せられた。好奇心が強いと言うより軽佻浮薄、尻軽女みたいだらしない年頃である。何しろ十銭で大きな豚まんが一皿に三個も載つていて。それだけ平らげればやや満腹になり、味も法外で、日本式食事しか他には知らぬ（その後、新開地の労資クラブで十五銭の洋食で開眼。あんなのは洋食の将外と言う人もあつたが、私の話はどうもミミツチい）私には珍味これに過ぎたるはないと思われた。それも事の始まりはデコちゃん（高峯秀子）が監督に連れられて南京町の老祥紀の豚まんを食し、あまり美味しいので幾皿かお代りしたとか新聞にゴシップされたのを友人が見つけて私を誘つた。老祥紀は大正四年創業だから、この豚まん専門店にはいろいろな有名人も来店したに違ひない。



ぶつく・えんど

角川書店から『図書館用語辞典』（三千二百円）が発売になった。編集は図書館問題研究会。現場の図書館員が作った「本」に関する百科辞典といった内容だが、

図書館というワク内だけでなく、本の生産、流通、消費の全面にわたって項目をもうけ、楽しい本の百科辞典になっている。本について知ろうとするなら、この本が案内役になってくれるだろう。実際の現場での蓄積を生かした解説はわかりやすく、親切な内容だ。本に少しでも近づこうとする人にすすめたい一冊だ。

* * *

日本丸の誘致運動が全国各地でくり広げられている。

横浜も強力だが、神戸も「日本丸」と「海王丸」が一般公開された十二月十二日を機会に、神戸誘致の百万人署名運動を開始した。海文堂書店でも一階から二階への階段の踊り場に署名用紙と机を設置して、この運動を支援している。十二日から二十日までの九日間に三百人を越

少しの飾り気もない狭くるしいこの店、それゆえまた有名だった。客も「お持ち帰り」の人が長い行列をつくて待たされた。しかし味がよろしい。出来あがりを待てば待つほど美味一級品と思われた。文芸春秋と不同調が盛んにゴシップ合戦をしたのは関東大震災のことだが、その風潮や余波がまだ尾をひいていたのであろう。私も文学少年とは言いながら、ゴシップ喰いのひとりであつた。へもしデコちゃんが現われはせぬかと千に一つの期待もではないではなかつた。どれほど美味佳品にしても東京からわざわざ来る訳はない。年少の者の夢にはそんな不条理なところがある。どうやら私も現在の週刊平凡や週刊明星の読者と同等であったと言える。

える人たちに署名をいただき、その後も次々と署名用紙が埋まっている。日本丸は昭和五年、川崎重工神戸造船所で建造され、神戸は母港。海のロマンをかきたてる帆船・日本丸はミナト・神戸っ子にとって海を象徴する船だ。出生地神戸へ迎えるために、ご来店の際は署名をお願い致します。

* * *

十一月十一日の毎日新聞に、ボランティアグループが字の大きな世界地図を完成したという記事が出ていて、目をひいた。記事によると、このグループは三十七年に結成されたボランティアの全国組織「点友会」の「弱視者用地図製作研究会」。京阪神のサラリーマンや主婦一人で、手書きで原図をつくり、製図や文字入れなど細い作業を二年がかりで完成。この研究会は一昨年（一九八〇年）には日本地図帳（三十二ページ）を作り、無料で全国の盲学校などに配布。その時は三〇〇〇部を発行したが申し込みが殺到、二〇〇〇〇部を増刷したほどで、当時から「世界地図も」の声が多かった。今回発行する世界地図帳はB4判で三十二ページ。国名、海流名の入

つた地図や各大陸の地勢図、航空路線図、鉄道図など目的別に細分化、見やすくしているのが特徴。世界地図帳は今回も無料で配布する。連絡先は、

亀岡市西つつじヶ丘大山台 [REDACTED]

(電)

[REDACTED] までお願い致します。

（略）



郷土誌の窓

冬の夜、鍋物をつつきながらの酒は格別に旨い。冬は酒とのつきあいが深まる季節だ。折りしも神戸新聞出版

センターから『生一本・灘五郷一人と酒と』(一千二百円)が刊行された。昭和五十六年一月～十月にかけて神戸新聞に連載されたもので、多彩な酒造家の足跡を追い、『灘の酒』の三百年の歴史的変遷をたどる。この本が面白いのは、酒をつくる人物が次々と登場してきて、歴史の綾を成していることだ。人間の物語としても楽しめる。

京都の伏見から灘へ進出して、『月桂冠』を販売高日本一にした大倉酒造の青年実業家・恒吉の話など、話題の豊かな一冊だ。今日の酒もまた、人ありてこそなのだ。

* * *

もう一冊、神戸新聞出版センターから本が出ている。

『島の生きものたち－淡路の生物誌』(九百八十円)がその本。淡路自然研究保護連合会の編集になるこの本は、淡路島に住む動植物百三十種の生態を春夏秋冬の季節

ごとに紹介した自然観察ガイド。植物・鳥類・昆虫・動物のガイドブックで魚類は含まれていない。写真とやさしい文章で解説されているので小・中学生の理科教材としても役立ちそうだ。

* * *

兵庫県歌人クラブが毎年刊行を続けている『年刊歌集』の第二十三号(昭和五十七年)が先ほど発行された。八百三十六名が参加した大歌集だ。何ページか読ませていただいたが、何かハチがウワーンと群をなして飛びかかる感じで圧倒された。それも、ほとんどがメス蜂なので、さらに圧倒された始末。定価は二千円。この『年刊歌集』ご希望の方は、

神戸市長田区花山町 [REDACTED]

兵庫県歌人クラブ までお問い合わせください。

* * *

兵庫県教育センターが発行している「兵庫の教育運動」(季刊)は現在三号まで刊行されている。兵庫の教育を父母と教師とで共に考え、つくっていくことを目指した

教育雑誌だ。特集名だけ記すと、創刊号は『兵庫の教育』はいま、第二号は『私の子育て、私の教育実践』、第三号は『平和教育』となっている。このたび、海文堂でもバックナンバーを含めてお預りすることになった。教育を考えていこうとしている人たちに広く購読をおすすめしたい。

なお、兵庫県教育センターでは、昨九月に『平和教育資料集・その1』として「教師たちの戦争体験」を刊行している。戦争の認識を深めるための体験文集で、多くの教師たちの文章が収録されている。また、この中には、『戦争認識を深めるために』文庫と新書のブックリストが掲載されている。こうした『文集』も『リスト』もどう現実の生活と教育現場の中で次代の子どもたちの中に届けていくか、それが大きな問題だ。

* * *

昨年六月に兵庫県教育会館で開催された、丸木位里・俊夫妻が描いた「原爆の図」展は、六日間の会期に約三万人が入場、大きな反響を呼んだ。兵庫県教職員組合は、反戦・反核の気持ちを同展を鑑賞していない人にも広め

られ、文化財級の逸品も多く、神戸市では一月十五日から「古地図の世界」として市立博物館で特別展を開き、一般公開する。特別展で展示するのは主要な百二十点。同館の井尻昌一館長は「特別展後は、常設展として順次公開したい」と話しておられる。

いま一つは、五十五年春に亡くなった中国文学の権威、吉川幸次郎さんの蔵書約一万八千冊が吉川家から神戸市に寄贈されることになった、という記事。神戸は吉川さんが生まれ育った土地で、未亡人のノブさん（七十二歳）が近く京都から神戸へ転宅するのをきっかけに話がまとまつた。神戸市では市立中央図書館に保管、目録を作るなど整理したうえで一般公開する。寄贈されるのは、清朝時代の学者・文人の原刊本など約一万三千冊と、関係一般書約五千冊。清代に限らず、中國歴代の哲学、史学、文学の各分野にわたる古典研究の基礎となる本がそろつている。研究者や読書子には価値ある文庫となることだろう。公開の日が待たれる。

* * *

灘神戸生協生活文化センターが生活情報を織りこんだ

ようと、『原爆を知っていますか』という小冊子を発行した。内容は「原爆の図」の紹介、解説をはじめ、広島や長崎に原爆が投下された政治的背景や被害の状況、核兵器のしくみ、原爆症の恐ろしさなどをわかりやすく説明したもの。B4変形判、三十三ページで定価は三百円。お問い合わせは、神戸市中央区中山手通四一十一八（電）

兵教組教育研究所まで。

* * *

十二月七日から八日の各新聞紙上に、二つのビッグな寄贈の記事が載って神戸市民の胸を躍らせた。一つは、日本海事史学会会長・神戸商船大海事資料館顧問の南波松太郎さんから古地図四千点が神戸市に寄贈されることになった、という記事。寄贈されたのは、江戸時代のものを中心に世界地図二百二十点、外国図七百点、蝦夷図六十点、日本図三百五十点、諸国図九百五十点、江戸三大都市（京都・大阪・東京）図千点、寺社関係図百七〇点、道中図三百点、その他名所、旧跡地など一百五十点。この『南波コレクション』は専門家の間で日本一と評価

季刊誌「V i t a（びいた）」を創刊した。毎日の暮らしに結びついた知識や情報を科学的視点から取りあげ提供している、創刊号の特集は『嘘む』と『新・掃除考』。B5判、四十ページで二百円。生協の各店舗で発売している。郵送希望の方は切手四百四十円分（送料込み）を添えて、〒658 神戸市東灘区田中町一、灘神戸生協生活文化センター「びいた」購読係までお申し込み下さい。（朝日新聞十二月七日）

* * *

当誌に原稿を寄せていただいている林喜芳さんから人誌『少年』の四十三号をいただいた。限定二百部のうちの貴重な一部だ。この『少年』は一年ぶりの復刊で、十二月二十一日・二十二日の新聞誌上に詳しく述べられている。林さんからは新聞のコピーも届けていただいて恐縮している。「少年」は、明治・大正生まれの『文学青年』たちが作っている同人誌で、平均年齢は六十五歳。読んでみると判るが、俳句・短歌・詩・随想などどれをとっても達意で年輪を感じる。『小賢しい壳文的なものより、反骨精神に徹したアマチュアリズム』を目指すと

★

新書ゾーンでは、一月一〇日から「ゼタミン健康法」
と題して、ミニフェアを開催しています。二月五日まで。
そのあと、「酷税とたかおう一税金一一〇番」を予
定しています。三月に入ると、「シェイプアップの本」
フェアを計画しています。

今月も「四角い本」「カバーブック」「絵本」「手帳」など

が豊富にそろっていますので、お見逃しなく。

■ 市文選本内訳

（略）

（略）